

学の際で迷子にならないために（特集 アジ研流読書案内 -- 研究者が薦める3冊）

著者	中村 正志
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	199
ページ	29-30
発行年	2012-04
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00045932

アジ研流
読書案内

—研究者が薦める3冊

学の際で迷子にならないために

中村 正志

この雑誌をわざわざ読んでいるからには、あなたはアジアや開発途上国の社会に関心があるに違いない。すでにいろいろの本を読んでいるだろうし、そのなかに心惹かれるものがあつたからこそ勉強を続けているのだろう。

そうした読者のなかには、「国際○○学部」や「地域××専攻」に所属する大学生や大学院生の方

がきつと思う。学際性を強調する学部や課程で気の向くままに勉強していると、マルチではなくノー・ディシプリンな人になりかねない。私自身がそうだった。それで将来困るかといえば…研究者にでもならないかぎりたぶん困ることはない。けれども、社会科学に共通の、ものを考える筋道を知っておくのは悪いことじゃない。かつての私と似たような環境にいる学生の方々に、私自身が「二

〇代前半のうちを知っておきたかった」と思うことがら書いてある本を紹介したい。

●高野陽太郎・岡隆編『心理学研究法—心を見つめる科
学のまなざし—』有斐閣ア
ルマ、二〇〇四年

地域研究には、実証の学問、という印象がある。でも、そもそも実証ってどういうことだろう？

なにをどうすれば、なにかを実証したことになるのだろうか。地域研究自体は、こういう「そもそも論」には答えてくれない。だからディシプリンの知恵を借りよう。

実証研究で僕らが確かめたいのは、「なぜ」という疑問に対する答えの妥当性だ。そうではなく、いつどこで誰がなにをどのようにしたかがわからないとき、それを既知の事実から推察することもま

た実証研究と呼ばれる。けれどもこの話は脇に置いておきたい。ここでは、因果関係を説明する仮説の妥当性を確認する作業を実証と呼ぶことにする。

あなたが政治と経済の関係性に関心をもっていて、「閉鎖的な政治が経済的な格差を拡大する」と考えているとしよう。この仮説の妥当性を確かめるには、まず、具体的にどのような現象を観察すれば「政治の閉鎖性」や「経済的格差」の程度を知ることができるのかを考えなければならぬ。この作業は、概念の操作化とか操作的定義と呼ばれる。そのうえで二つの現象の間の関係性を確かめることになるが、「政治が閉鎖的であるほど経済的な格差が大きい」ところが確認できたとしても、それで政治の閉鎖性が経済的格差の原因だと確かめたことにはならない。

逆に経済的な格差が政治の閉鎖性の原因になっているのかもしれないし、なにか別の現象が経済的な格差と政治の閉鎖性の両方を決めているのかもしれないからだ。

この本は、実証研究で気をつけなければいけないことをとてもわかりやすく教えてくれる。たとえば、「テレビで暴力番組を見ると子供は暴力をふるうようになる」という、いかにももつともらしい仮説の妥当性を確かめるのにも、なにをどれだけ注意しなければいけないかよくわかる。実証の方法論の概説は社会学者や政治学者も書いているけれども、この本は基本的な考え方を丁寧にわかりやすく教えてくれる点で優れている。この手の本を読んだことのない方だけでなく、有名な『社会科学のリサーチ・デザイン』(参考文献②)を読んだのだけでもよくわからなかった、というような経験がある方にもおすすすめしたい。

もちろん、この本が想定する手続き、つまり因果関係に関する仮説を立てて、その妥当性を検証するという作業をすることだけが学問ではない。それとは別のアプローチでアジアや開発途上国の社会を理解したいと考える人も大勢

いるはずだ。だが、むしろそういう方にこそこの本をおすすめしたい。ほかのアプローチを知ることでも自分のしていることがわかるようになる、ということもあるからだ。

● John Gerring, *Case Study Research: Principles and Practices*, New York: Cambridge University Press, 2007

学生なら卒業論文や修士論文を書く機会があるだろう。問題を立て、自分なりの答えを出したら、その妥当性を確かめたい。そのとき、心理学なら実験をするだろうし、経済学なら統計学の手法をつかって分析をするだろう。でも、テーマによっては実験や統計分析をするのが困難な場合もよくある。そんなときはケーススタディの出番だ。

けれども実際は、ケーススタディで仮説の妥当性を検証するのはむずかしい。『社会科学のリサーチ・デザイン』は副題に「定性的研究における」とあるのに、中身は少数事例研究へのダメ出しが多くて、「やっつけてはいけないこと」は学べるけれども「どうすればい

いか」はあまり学べない（もちろん、注意点を学ぶことはとても大事だけれども）。

この本とGeorge and Bennett [2005]（参考文献①）は、もっと実践的な指針を与えてくれる。訳書がないから読むのに苦労するかもしれないが、手間をかける価値はある。社会科学の範疇を越えて、たとえば会社員が仕事で必要なレポートを書くときにも、この指針は役に立つのではないかと思う。

この本のよいところは、事例の選び方について詳しい記述がある点だ。ある国や地域への興味が勉強の出発点になっている人にしてみれば、事例はあらかじめ決まっている。けれども、事例の選び方に関する考察は、特定の事例の特徴を考えると、特定の逆方向の作業にも役立つ。自分が扱う国やその由来事が、どんなカテゴリーに属す例で、そのカテゴリーのなかのほかのケースとくらべてどんな特徴をもつ例なのかを把握しておくことは大事だ。それによって、ケーススタディでなにをどの程度の説得力で説明できるかが左右されるからだ。

● アブナー・グライフ著・岡崎哲二／神取道宏監訳 『比較歴史制度分析』NTT出版、二〇〇九年

ディプリンに疎いところの私は、実証の段階よりもむしろ仮説を立てる段階の方かもしれない。既存の理論に頼らずとも、出来事を観察してなんらかの視点から解釈することはできる。けれども、その解釈を論文の冒頭にもつてきて、解釈を導くまでの思考過程を後に配置しても、仮説を検証したことにはならない。結論を先取りして提示しただけだ。あたりまえに聞こえるかもしれないが、これは結構ありがちな勘違いだから気をつけよう。仮説検証型の手続きをとるには、検証とは別の作業を通じて仮説を導く必要がある。その手立てとなるのが理論だ。

どんな理論を選ぶかは、その人の人間観とか社会観しだいたいと思う。おおざっぱに分ければ、人を社会に埋め込まれた存在とみる立場と、個人の主体性を重視する立場がある。けれども、社会か個人か、という二項対立的な捉え方には、直感的に違和感をおぼえる人も多いだろう。

グライフの制度論は、個人が社

会に縛られる存在であると同時に、主体的に選択する存在でもあることを前提にしている。巨大にして微細（◎開高健）なものと捉え方が魅力的だ。学部生にはむずかしすぎるかもしれないが、完全には理解できなくてもいい。教科書ばかり読んでいては飽きてしまうから、むずかしくても面白い本にチャレンジして刺激を受けよう。

（なかむら まさし／アジア経済研究所 東南アジア研究グループ）
「比較政治学・マレーシア現代政治」

《参考文献》

① George, Alexander L. and Andrew Bennett [2005] *Case Studies and Theory Development in the Social Sciences*, Cambridge, MA: MIT Press.

② G・キングほか著「二〇〇四」（眞淵勝監訳）『社会科学のリサーチ・デザイン—定性的研究における科学的推論—』勁草書房。